

官民協働の動きと政府の責任放棄

最近の社会の動きについて、小生の勘ぐりの感想を一つご紹介します：

* 戦後日本の政策は、一般にアメリカのやり方を模倣する方式で進められてきた。

* その間は模倣をリードする政府は、万事将来を見据えて手を打つことが出来た。アメリカの先行事例などを参考に、あまり大きな間違いをしないで進めてこられた。それに政策運営に必要なヒト、モノ、カネ、とりわけ情報、特に彼等が失敗したときに、その失敗に関する情報を公にすることなく彼等だけで独占できた。

* この間は、政府は何事も俺達の任せておけ、と胸を叩いて大きな顔をしていた。

* ところがなにかと先行してきたアメリカが、色々な分野(例えば公害対策等)で日本の後塵を拝するようになり、あまり参考にならなくなってきた。徐々に日本は自ら考えないといけなくなってきた。こうした動向に前後して、アメリカではレーガンを始めとする民間主導の動きが力を得、民間の自己責任なるものが盛んに強調されるようになってきた。

* アメリカでの先行例が使えなくなった日本政府は、自分で考え出すことになれていないこともあって、打開策を考え出せない。勢い民間とか自治体に対し、アメリカを真似て自己責任を強調し、何かという自己責任を持ち出すようになってきた。今までの“何でも俺に任せておけ、俺に相談せずに自分でやるな”と言う方式を放り出し、万事逃げの姿勢を取り始めたように思われる。この政府が取り始めた逃げの姿勢は、地方自治体にも伝搬し、各地で導入されている官民協働運動などにはこうした背景があるように思われる。

* 最近官の進める一見民主化、オープン化と見える動きには、実は官の責任放棄の実態があるように感じられる。

* ただ責任は上手く逃れながら、彼等がかって握っていた権限、権力は手放さないところに役人のしたたかさがあるように感じられる。住民は役人お上のやることには気を付けなければならない、と言う所以である。

(阿部哲夫 07-2-11)